

『清輔雑談集』の編纂意図について

芦 田 耕 一

一

『清輔雑談集』（以下、『雑談集』と呼ぶ）は上、下の二巻から成り、八十八の和歌説話で構成されている。編纂の事情については、その序文で次のように説明されている。^註

清輔は博覧の人にして、しかも重代のよみ口とかや。勝命云、清輔朝臣は哥の弘才、肩ならぶべき人なし。いまだよも見およばじとおぼゆる事を、わざとかまへて、もとめ出でたづぬれば、源よりさたしふるされたる事どもにてなん侍し。

「勝命云……なん侍し」は『無名抄』にみえており、編者はこれを引用してまず藤原清輔の博學ぶりを強調しておきたかったのだろう。前引の文に続いて、

それが書侍袋草子といふものの中に哥の故実、又興有て物がたりの種とも成べきもの、われらみじかき心のことある。これ注で清輔よりも後世の人の編集であり、『袋草紙』に取材していることがわかる。また、六条藤家の清輔の著作を基にしていることを明言することによって『雑談集』なる独立した書の価値付けを意図していたことはいま

でもなからう。

さて、『袋草紙』に拠っていることは明らかにしたが、その大部分は「雑談」「希代和歌」に取材しており、それゆえに『雑談集』と名付けられたのである。だが、「雑談」等のすべての話を採っているわけではなく、また『袋草紙』以外に取材している話もある。ここからもある程度の編纂態度をみることもできようが、次のようなことにも目を向けたい。一つには、各話ごとに「――事」という形で小題が付されていることである。『雑談集』の「和哥は有興事」（上巻）「和哥は好て無^レ益事有事」（上巻）という小題は『袋草紙』にある「和哥ハ有^レ興事也^{（注）}」「和歌好テ有^レ無^レ益事^一」に拠ったものであるが、『袋草紙』に題が付されているのはこの二箇所ぐらいである。『雑談集』は『袋草紙』に倣ってすべての話に小題を付しており、いわば『袋草紙』を再構成することを意図していたものと思われる。『袋草紙』では読みづらく、付すことよってわかりやすくし、読みやすくすることをねらっていたのだろう。いま一つは、同類説話がまとまって配置されていることである。このことは『袋草紙』にもみられたが、『雑談集』はより濃厚に表われているといえよう。志村有弘氏の指摘する例で少しばかり述べてみると、下巻の「大井川遊覧の事」「白川院西川に行幸の事」の連続する話はおのおの藤原公任と源経信の三舟の才を扱っており、『袋草紙』では連続しては出ない。また、上巻の「道雅齋宮に密通の事」「貞信公御哥不審之事」「三條院御製之事」の三つの話はいずれも秀歌といわれているものを扱っているが、その裏には、密通の事があった故に秀歌が詠まれたり、あるいは、実際は他人の作らしいものが貞信公や三条院の詠んだ歌として誤って伝えられたなどの事情があり、特に後の二話は共通するところが大きい。なお、この三話も『袋草紙』では連続して配置されていない。次に志村氏の指摘にはないが、『袋草紙』にない話で同類説話がまとめて配置されている例を挙げてみよう。それは、上巻の「顕仲哥の事」（『詞花集』に取材）「平基綱哥の事」（『金葉集』）「幼少娘哥よむ事」（『金葉集』）「八つに成娘哥よむ事」（『袋草紙』）「人のなき跡に

て哥よむ事」(『大和物語』『後拾遺集』)である。最初の話は娘に先立たれた父の歌、次は病に臥した時の歌、その次は瀕死の幼女が母を思う歌、そして幼女が歌を詠んだ前話との関連から『袋草紙』『希代歌』の「八つに成娘哥よむ事」を持って来て(『雑談集』の「希代之和哥の事」では「八つに……」の話を載せていない。重複を避けたのである)、最後に、友人の死を悼んだ話と能因の陸奥再下向の際に武隈の松がなくなっていた話とを持つ「人のなき跡にて哥よむ事」で、この話群を締め括っているのである。ところで、この「八つに……」の話は『袋草紙』に「幼児歌」として、

神無月時雨降まもくるゝ日を君待ほどはながしとぞ思ふ

是は人の子の八に成けるが、母の物へ行たるを待兼て、時雨のしける日読る也。

鶯よなどきはなくぞ乳やほしきこなべやほしき母や恋しき

是はまま母の許に有りけるに、庭前につちなべの有りに、我腹の子にはとらせて此継子にはとらせざりければ、鶯の啼くを聞きてよめるうた也。

とみえるが、『雑談集』には、

或人の妻身まかりて亦こと妻をむかへたりける。その娘とはじめの妻の娘と庭に出てあそびけるに、継母我娘に土なべのありけるをとらせ、まま子にはとらせざりければ、鶯の鳴をきゝてかくぞよみける、

鶯よなどきは鳴ぞ乳やほしきこなべやほしき母やこひしき

とあり、「神無月」の歌の話はみえない。「神無月」の歌は『俊頼髓脳』、「鶯よ」の歌は『西行上人談抄』『俊頼髓脳』にもみえており、前者については『袋草紙』とほぼ同じ記述であり、後者については『談抄』に「小児のたどくあゆみしたる体の歌 鶯よなどきは鳴くぞちやほしきこなべやほしき母や恋しき 此歌は貫之が女の九にてよめるなり。俊

頼朝臣は此歌詠じて落涙しけり」とあっておよそ『袋草紙』と違っており、『髓脳』は『袋草紙』とほぼ同じである。『雑談集』はこれらとは違っており、これは継子の話を採り入れるに際して、前話の幼女の死とも関連づける意味からかであろう、或人の妻身まかりて亦こと妻をむかへたりける」と書き加え、そして「神無月」の歌を詠んだ子によってこの話を八歳の子供に関するものとしたのである。編者の編纂態度が色濃くあらわれているといえよう。同類説話がまとめて配置されている例をいま一つ挙げてみよう。同じく上巻の「男に捨られ無便女哥よむ事」「丹後にて式部哥の事」「藤原賢子哥の事」の三話が連続して配置されてある。最初の話は男に捨てられた女が瀕死の床で詠んだ歌を男に遣わす話（『後拾遺集』）、次は「和泉式部保昌が妻となり丹後にありし時、明日狩せんといひける夜、鹿の鳴をきゝて詠」之ことはりやいかでか鹿のなかざらん今夜計の命とおもへば」という話（『後拾遺集』）であり、最後は病に臥した賢子が見舞の手紙に対して歌を詠んだ話（『金葉集』）であり、これも三話の共通点は病と死にある。同じ内容をもつ前の話群とこれを合わせると七つの話になり、しかも他に取材しており、編者がこうまでしたのは『袋草紙』にこういう内容の話がほとんどなかったからに他ならず、これは各方面の和歌説話を集めようとした編者の意図と考えてなら差し支えないだろう。あるいは和歌説話集として『袋草紙』を超えようとする意識があったと考えてよいかもしれない。

二

次に、別の面から編纂態度をみてみよう。『雑談集』はすでに指摘されているように、『十訓抄』や『無名抄』を編集の重要な資料としている。特に『十訓抄』を承けたものが多く、「有^二和哥に六人の党^一事」（下巻）はその一つ

である。この話は、

江ノ記に云、和哥の道に取て、往年六人の党あり。所謂、範永、棟仲、頼実、兼長、経衡、頼家等也。年をへて後、此輩逝去して頼家一人残りたりけるに、為仲と云者、奥州より哥を頼家に送ん。哥の意、君と我なまじひに残しよしをよめり。頼家いかりて云ッ、為仲当初此六人に入らず、君と我と生残しよし、安からぬ事とて、返哥に不レ及と云々。

であり、この有名な話は『袋草紙』にもあるが別の話を加えてふくらんだ形になっている。煩を厭わず記してみると、

江記云、往年有^二六人党^一。範永、棟仲、頼実、兼長、経衡、頼家等也。至^二頼家^一者彼党頗思^二低之^一云々。範永云、兼長常有^下到^二佳境^一之疑上。此経衡所^レ怒也。又云、俊恵曰、頼家又称^二此由^一。為仲後年自^二奥州^一送^二歌於頼家許^一。歌心所^レ遣之人、君与^レ我也と云々。頼家怒て曰、為仲当初不^レ入^二此六人^一。今称^二君与^レ我生遣之由^一、不^レ安事也と云々。

である。『十訓抄』(「可^レ定^二心操振舞^一事^下」)は『雑談集』とほとんど同じである。『袋草紙』は三つの話で構成されている。一つは頼家が六人党の中で低く評価されていること、また一つは範永が兼長の作歌技量を低く評価していること、いま一つは六人党に入らなかつた為仲が六人党の中でただ一人生き残っている頼家に歌を送って、歌の精神を知っているのは頼家と為仲だけだと評価したことに対して頼家が憤慨したこと、ということになろう。兼長の評価をめぐって範永と経衡の対立のみられる話もそれなりにおもしろいが、興味深いのはなんといつても最後の話である。『雑談集』の編者は、これらはいずれも六人党に関するものであるが、このままでは話の焦点がぼけてしまい——しかもはじめの二つは短い話である——、興味がそがれる恐れがあると感じたのであろう。そこで、『十訓抄』

を見たところ、中心となる最後の話だけが採られており（この話は『十訓抄』が『袋草紙』を承けたといわれている）、しかも「その結末を『袋草紙』は、六人党の中に数えられもしなかった為仲が、頼家に歌を送ってお互いを同格扱いにしたことに対する、頼家の怒りの言葉で結んでゐるのに、『十訓抄』は、「返歌に不^注及ける」という言葉を添えることによって頼家の怒りを具体的にとらえている」という指摘があるように、『十訓抄』の方が話としてはおもしろく、そのためこれに拠ったのであろう。

次に「秀歌は下司迄うとふ事」（上巻）という話で論を進めていこう。

元慶は大山別当也。つくしにて郭公を詠^ズ。

我宿の垣ねな過そほととぎすいづれの門もおなじ卯花

其後上洛の時、山崎辺にて此歌を下女曰引まわしてうとふ。元慶これをききて拭^レ涙^ヲよろこびけるとぞ。とあって元慶に関する話はこれで終っている。この話は『十訓抄』には出ない。『袋草紙』はこの引用部分まではほぼ同じであるが、これに引き続いてこの歌についての『難後拾遺』の説を紹介する。

此歌筑紫に侍る時、良暹我歌となむいふとき、是は古歌とこそ聞しかと云侍しかば、七十法師の若き上にてよみたりしかば、古歌と申、虚言ならずと申を、

『難後拾遺』の著者源経信は「我宿の」の歌は古歌と聞いたことがあると良暹に質したところ、彼は七十歳の彼が昔詠んだので古歌だといわれていると答えた。そこでこの歌の入る『後拾遺集』の撰者に尋ねたところ、

実源律師、筑紫に有し時、元慶正しく読たる也と申せば、其由を存ずる也と云々。

と答えたのである。そこで経信は次のような結論を出した。

実源、資通大弍任ニ下向、良暹が曰^ニ吾歌一之事其前也。良暹が歌を書いて出せりけるにや。元慶僻事也、

二云々。

実源の筑紫下向は源資通が大宰大弐の任にあったときなので良暹が自作だといった年代よりもこのことであり、元慶が良暹の歌を盗作したのであろうと考える。『難後拾遺』は『後拾遺集』に不満を抱き、その中の歌をとり挙げて論難を試みたものである。清輔はこの話を書き付けそして『難後拾遺』の作者名批難を付記したのである。しかし、この付記によって良暹作かもしれないということを知った読者には元慶の感激したことの意味が解せず、この話の興味が半減することは否めないと思う。だが、異説があるのを知っている清輔にとってははけっして無視してしまうわけにはいかないものであり、それは歌学者として良識ある態度といえよう。むしろ彼にとつてはこの異説に興味があるのであり、一方、『雑談集』の編者には、自分の歌が下女によってうたわれているのに感激した元慶の話だけがおもしろいのであって、『難後拾遺』のいわば論証風な批評は蛇足にすぎず、これを無視してしまつたのである。これはあくまでも説話に重点をおいていたからである。現に元慶の話のあとに、「秀哥は下司迄うとふ事」にあうような話を載せている。

世中はうき身にそへるかげなれやおもひすつれどはなれざりけり

といふ俊頼朝臣の歌を、かがみのくぐつどももの神哥にうたひければ、俊頼きゝ給ひて、いたり／＼にけるものかなとていみじうよろこび給ふとなん。

これは『無名抄』に取材している。さらにこれに続けて同じく『無名抄』に拠つて永縁僧正と敦頼入道の話を書いている。いま一例挙げてみよう。「式部赤染和哥勝劣の事」(上巻)は藤原定頼が父藤原公任に和泉式部と赤染衛門の歌の優劣を尋ねることからこの話が始まる。公任は同列には論じられないとしながらも、式部の「津の国のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重ぶき」を誉めており、彼女の方を高く評価していると思われる。そしてこの

あとに、良暹が赤染の方は歌合や屏風歌に秀歌が多いので彼女が優れていると述べた話を『江記』から引用し、最後に清輔の考えを述べる。

予案^{アンセル}之^{コレヲ}仰^{アラハレ}可^シ信^{シメス}ニ大納言(注、公任)ノ説^{セツヲ}。何^ゾ良暹が義につかぬや。但^タまことにも哥合のごとくならば赤染たしかなる哥よみ也。又式部が哥度々哥合にいららず。花山院[#]長元等也。

『袋草紙』もここまではほぼ同じである。『十訓抄』には出ない。最後の文の「花山院」とは「花山院歌合」(この実態ははっきりしない)。「長元」とは長元八年五月十六日に藤原頼通第で行われたいわゆる「賀陽院歌合」(資料が残っているため実態ははっきりしている)のことと考えられている。式部の歌は『和泉式部集』(神原家本^ま)に「花山院歌合、七月七日」とあり、『統詞花集』(清輔撰)に「花山院歌合の時、露をよみ侍りける」とみえており、これらによるかぎり、「花山院歌合」に取られていることが分かる。一方、「賀陽院歌合」には彼女の歌はまったくみられない。さて、最後の一文が前文とどう繋っているかをここで問題にしよう。『袋草紙注釈』の「通釈」では、「花山院[#]長元等也」を「彼女の歌がはいったのは世にいう『花山院歌合』『長元歌合』などである」とするが、どうだろう。清輔の撰した『統詞花集』に前述のとおりみえることから、清輔が「花山院歌合」に入っていることを知らないはずはないと考えて、こういう解釈を施したものであろうか。これでは、「度々哥合にいらす」そして「(入ったのは)花山院[#]長元等也」ということになり、屈折した文脈となり、両文の続き具合が必ずしもしっくりとはいかず、また、資料の残っている「賀陽院歌合」に一首もみえないことは無視できない事実であろう。ここはいま、式部の歌が入らなかつた「度々哥合」の例として「花山院[#]長元等」の歌合があると考えた方がより穏当であろう。

さて、『雑談集』はこのあと「紫式部日記ニ云々……」として『紫式部日記』にある有名な和泉式部評の一部を載せている。「紫式部日記ニ云々……」は『袋草紙』諸本のうちの多くの本に頭註として存在しており、編者はこれを

採ったのである。『雑談集』はこれで「式部赤染和哥勝劣の事」の話を終るが、『袋草紙』には実はこのあとに、

但長元歌合時、有^二 中宮亮為善、権亮兼房、大進義通、藏人橘季通、源頼家、平経章^一。此輩歌不^レ入云々。

という文がある。この部分は「但長元歌合時」からみて前文の「花山院[#] 長元等也」からの続きであり、「予案^レ之」の内容と考えられる。為善以下五人の者は方人や員刺として確かに「長元歌合」に参加している。彼らはいずれも勅撰集に入集している歌人である。ところが、この歌合には歌が採られなかったというのである。この引用部分のニュアンスとしては、彼らは「長元歌合」に歌人として参加すべき人物であるが、そうはならなかったというふう
に読みとれよう。そして式部のことを述べた箇所に戻って合せ考えると、式部もこれらの歌合（特に「長元歌合」）
に歌人として歌が採られるべきだが、そうならなかったのは、彼らの例からみてけっして下手な歌人であったからで
はないといたったのではなからうか。つまり式部を弁護するために、この但し書きが必要であったと考えたいの
である。清輔は前引の文からもわかるように、式部の方が優れているとする公任の評価に賛成しており、ここからも
右のように解釈することは許されよう。またこう考えると、「花山院[#] 長元等也」の前文との繋りは前述の私の解釈
がよくはないだろうか。

さて、「但長元歌合時……」は『雑談集』にはないが、どう考えたらよいのだろう。「但……」という論証風な箇所
があることによって清輔の式部弁護に一つの論拠が示されるのであるから、けっして省略してはならないはずであ
る。ところが、『雑談集』の編者は少くとも前の部分の続きであると思っただであろうが、そういう箇所であるとはま
ったく気付かず、単なる備忘録的な記事——「長元歌合」が問題になったついでに、それに歌の入らなかつた勅撰集
歌人を覚え書き風に記した——と思いき、¹「紫式部日記云……」を付加することによって和泉式部の話としてほこ
れでこと足れりと考えたのであろう。これは歌学者的な態度とはおよそ異なつた立場に拠りかかっていた者の所為で

あろう。

次に、『雑談集』が『十訓抄』に拠つて、ある部分だけを補つた例を挙げて、さらに検討を加えていこう。「顕基出家の事」(下巻)は、

中納言顯基は後一条院近習之臣也。而ニ長元元年四月七日院崩御。同ヲ廿二日ニ奉遷ニ上東門院ヲ。此日於ニ大原ニ出家。生年三十七也。時ノ人落涙と云々。其後横川に籠居之比、(中略)此人道心堅固にして後には上のだいに住て往生を遂られけると也。(後略)

という話である。ここに挙げた最後の「此人……」の部分に『袋草紙』には「此人本より道心之者と云々」とあり、少しは違っているが他がほとんど同じであるので『袋草紙』に拠つたものである。最後の部分は、『十訓抄』(「可存ニ忠信・廉直旨」事)に「後には、上の醍醐に住て、往生をとけてけり」とあり、「此人本より……」にこれを付加したものと思われる。顕基はその後どうなったかは万人の知りたところであり、上の醍醐寺に住んでそしてそこで往生を遂げたことをつけ足したのであろう。いま一例、「哥を難じて閉口の事」(上巻)を挙げてみよう。

同時の御屏風の哥、擣衣の所兼盛詠云、

衣うつべき時やきぬらん

紀ノ時文、件の色紙形を書時、抑レ筆云、見在擣衣をして衣うつべき時やきぬらんと詠ずるの条、如何。仍テ兼盛に被レ問の処に申て云、貫之延喜の御時、御屏風駒迎の所に、今やひくらんもち月の駒と詠ぜしに、有ニ此難一歎、如何。尔今時文閉口。殊に時文は貫之が子にて、かく難じける、いよいよ恥辱と也。

この有名な話は、『袋草紙』は「于レ時時文閉口云々」で結ぶが、『十訓抄』(「可レ誠ニ人上多言等」事)では「時文口をとぢつ。しかも時文は貫之が子にて、かく難じたりける、いよいよあさかりけり」で結ばれている(『十

訓抄』とほぼ同時期の成立と考えられる『古今著聞集』はこの話全体が『十訓抄』と酷似する。『雑談集』の編者は『十訓抄』にヒントを得て少し変えて付記したのである。それは時文が貫之男であることをあえて示すことによつて時文の不名誉を強調し、話をおもしろくすることにねらいがあったからであろう。

最後に、『袋草紙』『雑談』にありながら『雑談集』に採られていない話を挙げて考えてみよう。

猿丸大夫家集、最先歌

白菅のまの、萩原行さこさ君こそみらめまの、萩原

此歌如^ニ万葉集^一、高市黑人妻歌也。若猿丸大夫件人歟。然者女房也。而如^ニ家集^一者送^ニ女許^一之歌、而已男也。集失歟。(以下略)

これはまったく説話的部分を含まず、あまりにも歌学的に過ぎ、そのため『雑談集』には採られなかったであろう。次の例はどうだろうか。

子金葉詞花両度之撰逢^ニ千載一遇^一空過^レ之、遺恨第一也。初幼少、後ハ撰集者^々子息歌無^ニ入^レ之例^一云々。大愁。曾祖父隆経朝臣後拾遺作者、将作又入^レ之。故左京金葉集作者。四代之箕裘至^ニ予之時^一闕^レ之。遺恨云々。

これは三代も続いた勅撰集入集という偉業が清輔の代になって途絶えてしまうことを嘆いた話である。これは話としておもしろく、採られる可能性も大いにあったかと思われるが、まず「予」とあってそれから「遺恨第一」「大愁」「遺恨」と続けて出てきており、あまりにも個人的事情に終始しており、かつ感情的であつて単なる愚痴話に終つてるように感じられる点が編者の嫌つたところではなからうか。いま一例、同様な例を挙げよう。

予追^ニ先蹤^一、叙位之時、故鳥羽院申文^ニ副之歌

やへくの人だにのぼる位山老ぬる身にはくるしかりけり

是有^二募申事^一 四位二度々漏了。昆弟等ハ到^二四品^一 無^二聽事^一 思て所^レ詠^レ之。賢有^二御感^一、其後叙^二四品^一。仰云、重代者かたほなる事だにあり、尤有^レ興之歌体雖^二別様^一 御哀憐之至歟。此所望之始ニ仰て云、是ハ歌読之男歟。為^二此道之宗^一 者也。尤可^レ然云々。其後空漏と云々。又取^二御気色^一 之処、和歌凡事忘却申と云々。如^レ此每度和歌出来之故、乍^レ恐所^二進覽^一 也。末代勝事也。世以珍重之由謳歌と云々。

およその意味は、弟がすでに四位になっており、清輔も四位にしてみらうために、「やへく」の歌をさしあげたところ、やっと念願がかなえられた。以前にも二度ほど歌を献上したが、いずれもかなえられなかった。ただし、除目の度ごとに歌を献上するのは珍しいことだと人々は誉めていた、ということになる。歌でわが身の不遇を訴えることによってようやく四位に叙された話であるが、これは充分に説話に価するものである。これも『雑談集』に採られておらず、その理由としては、やはり前の話と同様、あまりにも個人的な話に偏していたからであろう。これからいえることは、たとえ説話としてふさわしい内容であっても、清輔個人が前面に出る話を嫌ったということになる。

このように、『雑談集』は『袋草紙』に依拠しているとはいいながら、ほぼそのまま採用したものもあれば採用しないものもあり、また、そのある一部分を削ったりあるいは他の資料によって一部分を補っているなど、手を加えたことが明白であり、これは和歌説話集としてふさわしい形に整えようとする編者の態度のあらわれであろう。ついでながら、今までの『袋草紙』との比較の上で浮かび上がってきたことではあるが、『袋草紙』はたとえ「雑談」部であっても歌学的要素の濃いもので構成されているということを言い添えておきたい。

『雑談集』の説話集的要素を指摘しておいたが、別の面からこの書物の性格を考えてみたい。すでに指摘されていることではあるが、『袋草紙』に出る和歌に不完全なものが多いが、『雑談集』ではそれが完璧な形で示されることがよくある。たとえば、「範永秀哥の事」(下巻)では次のようになってゐる。

範永朝臣哥には、谷の鶯一こゑぞする染^{ソム}肝胆^{カンタン}ニ、以^ニ此哥^ヲ彼人^ヲ為^{スル}第一ノ秀哥^ト之由、年来^{オシテ}心中^ニ所^レ存也。然ども余ノ人必しも不^レ然之氣也。或人語^テ云^フ、古老伝話^ニ云^フ、範永云^フ、我身今生の秀哥ハ此歌也と称すと云。愚意忝^ク通^{スト}彼^ノ意^ニ。深く自愛する也。

尋ねぬる宿は霞にうづもれて谷の鶯一こゑぞする

これはほとんど『袋草紙』と同じであるのでこれに拠っているとされるが(『十訓抄』にはみえない)、ただこれには「尋ねぬる」の歌が完全な形で示されていない。『雑談集』の編者は文中に「谷の鶯一こゑぞする」とあるだけでは読者にどういふ歌かわからないので、最後に付記しておいたのであろう。

「恵心僧都和哥を好み給ふ事」(上巻)にあるあとの話は白河院が淀に方違の行幸を行った五月のある暁ころの話である。

暁^{アカツキ}になるほどに、むかひの方に時鳥一こゑほのかに鳴て、すぐ俊頼一首詠せまほしくおぼすに、女房の舟の中よりしのびたる声にて、淀のわたりのいまだ夜ふかきとながめられたり。時にのぞみて目出たかりき。人々感歎していまだ忘れず。あたらしくよみたらんにはまされりとなんいはれけり。何方へ鳴て行らん郭公といふ古哥の末なるべし。

これは『袋草紙』とはかなり異っており、『十訓抄』に拠ったものである。しかし『雑談集』の「何方へ……」という一文が『十訓抄』にはない。独自のこの一文は、女房の誦した古歌の本句が「何方へ鳴て行らん郭公」であろうと推測する旨の付記であって、編者があえてこうまでしているのは、この歌の本句が何かを説明するだけでなく、それ以上に、この歌を誦することがこの時・場所・情況においていかに叶っていたかを読者に説明することをねらいとしていたと考えられる。

この二例は不完全な形を補ったという点をとりたてて検討してみたが、これとは違った例をとり挙げてみよう。

『袋草紙』で説明すると、下野守である源経兼のもとに都から使者がやって来たが、彼はろくな接待もせず、使者が帰ろうとする時になって呼びとめたので、使者が戻って行くと、「あれ見給へ、室の八嶋は是也。都にて人に語り給へ」と言い、使者は「弥腹立気有て出」て行ったという話である。『十訓抄』もほぼ同趣旨であり、「いよく腹立してかへりにけり。これもまた、かたはらいたくおかし」で終っている。『雑談集』(上巻「室の八嶋の事」)は『袋草紙』に拠っているが、ただ「いよく腹立気ありと云々」のあとに「哥に フクリウキ いかでかはおもひありとはしらすべき室の八嶋の煙ならでは 下野国の野中に嶋あり。清水の出て気の立がけぶりに似たる也」と『袋草紙』にはないものが付加されている。これは和歌を完全な形にして示すという前例とは違う。「いかでかは」の歌は藤原実方作で、『詞花集』『玄々集』『古来風躰抄』に採られており、秀歌である。「室の八嶋」は歌枕として有名であるが、『袋草紙』にはこれを詠んだ歌が示されておらず、そのため編者はこの秀歌を採りあげて説明し、かつこの歌の意味を付すのである。これは明らかに読者に教示することを考えての所為であろう。また『袋草紙』にはほとんどみられない、たとえば病や死に関する話を他から多く取材しているということは前に述べたが、これは一つにはおのおの場にふさわしい歌のあり様を教えるためではなかったかといま考えられる。特に、『詞花集』に取材する「顕仲哥の事」(上巻)は、

神祇伯頭仲娘にをくれて服フツきけるとてよめる

あさましや君にきすべき墨染の衣の袖をわがぬらす哉

とだけであり、また『金葉集』に拠る「藤原賢子哥の事」(上巻)も、

賢子病にふしてよろづ心ばそくおぼしめしけるに、人の許より如何ととひて侍りければ、かく詠じ給ふ哥、
いにしへは月をのみこそながめしか今は日をまつ我身也けり

とあって短い話である。これらを探る編者の意図はあるいはそのあたりにあったのではないだろうか。

四

このように、『雑談集』は『袋草紙』『雑談』に依拠しながら和歌説話集によりふさわしいものにすることを意図していたと考えられ、なおかつ説話を読んで楽しませるだけでなく歌に関する手引き書的なものを編むつもりであったのだろう。『袋草紙』『雑談』がそもそも和歌説話を読ませるだけでなく、これを基にして「作歌上の心得を教示する意図」詳註があったことはいうまでもないが、『雑談集』においてはこれが色濃くあらわれていることにその特徴があるといえよう。

注1 本文は藤岡忠美先生・芦田編『清輔雑談集 貞享二年版本』(和泉書院刊)に拠る。なお、『雑談集』に写本は伝わらず、版本としては貞享二年本と安政五年本がある。

注2 『雑談集』の成立は江戸時代であり、あるいは刊行時の貞享一年に近いところかとする考えがあるが(小沢・後藤・島津・

桶口共著『袋草紙注釈下』の「解題」、妥当であろう。編者については不明である。

注3 『袋草紙』の本文は佐佐木信綱編『日本歌学大系』第二巻に拠る。なお、旧字体は新字体に改めた。

注4 志村氏『清輔雑談集』（芸林舎刊）

注5 注4に同じ。小沢他著の前掲書。

注6 『十訓抄』の本文は永積安明先生校訂『十訓抄』（岩波文庫本）に拠る。

注7 永積先生『十訓抄』の世界」（『中世文学の可能性』所収）

注8 注7に同じ。

注9 『私家集大成 中古II』所収本文に拠る。

注10 注5に同じ。

注11 『説話文学必携』（『日本の説話・別巻』の「袋草紙」項（上野理氏執筆）